

東大 **発** 2013

年刊
Vol.3

ト ウ ダ イ ハ ツ

働く × 社会

*Crossing the border
towards society*

インタビュー

鈴木菜央さん
小山登美夫さん
西田一平さん
伊東豊雄さん
近藤大介さん

2012年度 全学自由ゼミナール「メディア創造ワークショップ」作品



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

目次

ご挨拶

タフな東大生を育成するための多様な経験

佐藤 慎一 理事・副学長

新しい教養教育の模索、Early ExposureとLate Specialization

永田敬 東京大学教養学部 教養教育高度化機構 教授

社会と連携する、学生参加型の教育カリキュラムの創造を

吉見俊哉 大学総合教育研究センター センター長

メディア創造ワークショップの挑戦

中原淳・重田勝介 大学総合教育研究センター

インタビュー

インタビュー1

鈴木菜央(NPOグリーンズ) 「長いものに巻かれすぎるな」

インタビュー2

小山登美夫(ギャラリスト) 「もっと色々な感情が世の中にあった方がいい」

インタビュー3

西田一平(世界銀行) 「世界平和と自分の幸福」

インタビュー4

伊東豊雄(建築家) 「やってみようか、の連続が一つの軌跡を描く」

インタビュー5

近藤大介(講談社) 「外と向き合うことは内と向き合うこと」

謝辞

ご挨拶

タフな東大生を育成するための多様な経験

佐藤 慎一

理事・副学長

現在、東京大学はグローバルな人材競争、研究競争に耐えうる「タフな東大生」を育成するため、様々な教育基盤・研究基盤の整備を行っています。「タフな東大生」の育成には、多様な学習経験が必要になります。

東京大学 大学総合教育研究センターは、全学の教育改革の支援を担っているセンターであり、ここで企画された「学生が情報発信主体となりメディアを創造する」というこの授業は、「タフな東大生」の育成に必ずや貢献してくれるものと、私は信じています。

このたび、授業の成果が電子書籍「東大発2013」のかたちで一般に公開になったことは、非常に嬉しく思います。駒場の学部学生のみずみずしい感覚によって生み出されたインタビュー記事をぜひ、お楽しみください。

新しい教養教育の模索、Early ExposureとLate Specialization

永田敬

東京大学教養学部 教養教育高度化機構 教授

このたび、東京大学 大学総合教育研究センター教育課程・方法開発部門が実施する「メディア創造ワークショップ」に対して、教室環境の整備等で、教養教育高度化機構として協力しえたこと、そして、本授業の成果を世に問えたことを、嬉しく思います。

戦後設立された東京大学の教養学部は、Late Specializationの理念をかかげ、これまで数多くの優秀な人材を社会に送り出してきました。この理念に加え、近年、Early Exposure（多様な専門知を早い段階で）をいかに両立するかが、教育課題となっています。本授業のような実験的試行を通じて、教養教育の新たな教育課題へのチャレンジを行っていきたいと感じています。

社会と連携する、学生参加型の教育カリキュラムの創造を

吉見俊哉

大学総合教育研究センター センター長

「メディア創造ワークショップ」は、東京大学 大学総合教育研究センター教育課程・方法開発部門が取り組んだ、学生参加型のメディア創造実践です。

この授業では、学生が自らの興味関心に基づき、社会の様々な人々にインタビューにおもむき、そこで得た知見をもとに電子書籍を開発しています。ここで行った「メディア創造実践」は、一般の一斉授業では得られない多種多様な経験を学生に提供することになると考えており、東大の掲げる「タフな東大生」の育成に必ずや貢献しうるものになると考えています。

学部学生の比較的早い段階から、社会と連携する授業を経験することは、Late Specializationの理念を掲げる本学において、今後、取り組まれるべき教育課題のひとつであるように感じます。「東大発2013」に続き、「東大発2014」が生まれることを願っています。

授業について

メディア創造ワークショップの挑戦

中原淳・重田勝介

「メディア創造ワークショップ」は、「電子書籍の出版」を舞台とした「表現」に関する授業です。学生たちは「働く」というテーマに基づいて、学生がグループで議論し、取材対象と自らの主張を考え、実際に学外へインタビューに出向き、取得してきた語りを映像とテキストにまとめ、電子書籍「東大発2013」のかたちでパブリッシュします。この授業では、メディアによる「言説の消費」ではなく、自らが「言説の作り手」「表現主体」の立場で参加することが求められます。

私たちは、この授業は「キャリア教育」でもあり、「メディア教育」でもあり「ライティング」の学習機会でもあると考えています。「働く」というテーマに真正面から取り組んでいるという点では、それは「キャリア教育」と形容できるかもしれません。またコンピュータや各種のAV機器を駆使している意味では「メディア教育」であるともいえます。「書くこと」を求めますので、それは「ライティング教育」と形容されるかもしれません。しかし、メディア創造ワークショップは、そのどれかひとつのラベルで表現される授業ではありません。

「学ぶこと（大学）」から「働くこと（職業）」への移行が問われている現在、この多面体の授業が、学生に豊かな内省と行動の機会を提供できることを願ってやみません。

記事の文章表現には、時に稚拙な部分もあることかと思えます。しかし、この「東大発2013」には、学生がいかに「働くこと」に向き合ったか、彼らの思いが溢れています。どうか、温かい目でお楽しみいただければ幸いです。最後になりますが、本授業にご協力頂いたゲスト講師の皆様、インタビューに答えてくださった皆様には、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

「長いものに巻かれすぎるな」

NPOグリーンズ 鈴木菜央

インタビュービデオを見る ▶



「就職に強い学部に行け」「早いうちに海外に出よ」一学生である私たちに世間は慌ただしく語りかける。社会に出ても、明日の未来も保証されていないような閉塞感ただよう今の日本で、私たちはこうした”ストーリー”をなんとなく受け入れてゆく。しかし、もう一度考えてみたい。自分は本当に何をしたいのか、いったい何が幸せなのか。一般化された人生のストーリーに乗せられつつも、どこか煮え切らない心の葛藤を、今回、NPOグリーンズ代表の鈴木菜央さんにぶつけてみた。

鈴木さんは2006年、「ソーシャルデザイン」をテーマとしたウェブマガジン「greenz.jp」を立ち上げ、現在はNPOグリーンズで代表を務める。このウェブマガジンは「あなたの暮らしと世界を変えるアイデア」の名の下に、芸術や音楽、環境問題、持続可能なコミュニティなどさまざまなテーマにまつわるワークショップやイベントを

取材し、世の中をワクワクさせる新しい価値観や活動を紹介している。

そんな鈴木さんがグリーンズとしての活動を始めたきっかけは、大学入学直前にさかのぼる。1995年の春、阪神淡路大震災後の神戸でのボランティアだった。

「震災後、いろんな人がボランティア活動に参加していました。配管工のおじさんから、大学生、主婦、休暇をとってきたサラリーマンまで。その人たちはもちろん一銭もお金はもらえないわけだけど、みんなが復興のために力を合わせる姿はきらきら輝いて見えました。ものすごく一生懸命だから、奇跡的なことも色々起こったりして、その様子を見たときに「人間の可能性ってすごいな」と感じたんです。けど、東京に戻ってきて思ったのは、朝の山手線のラッシュアワーで、みんな表情が暗いということ。神戸で見たように、一人ひとりがパワーを発揮できる状況がない。有事のときだけでなく、普段から、人が自分の可能性を最大限に発揮できる社会になればいいのに。それで、世界中のいろんな社会的な課題に対して、それぞれが自分の問題として向き合っていくことを「ソーシャルデザイン」の事例として紹介することで、みんなの意識が変わるきっかけを作りたいと思ったんです」

人間が自分の可能性を最大限活かせる社会。それはあまりに大きな理想に聞こえる。だが、彼は自分の理想をどんどんと現実引き寄せていった。ウェブマガジンを立ち上げるにあたり、まずはメディア業界で経験を積もうと出版社に入社。しかし、数年勤めたのち、ある企業に協力を受け念願のウェブマガジンを立ち上げるも、資金難でその部署が解散になってしまったという。

「また振り出しに戻ったなあというのが正直なところでしたが、ここでやめたらずっとサラリーマン生活になることを考えると、諦めちゃだめだと思いました。もともとサラリーマンとか、人にやれといわれたことをやるのが苦手な性分だったので、どうせ働くのが苦勞の多いことなら、自分で作った条件で苦勞しようと思って、ウェブマガジン続けることにしたんです」

そのように、半ば頑固に起業を諦めなかった背景には、自分の将来を思い描いたときの私生活も関わっていたという。

「自分のはじめての子どもを抱っこしたときに、愛情と同時に「この子の生活は自分にかかっているんだ」という焦りの気持ちがありました。出版社のサラリーマンとして働いてお金をもらっていたから、それで生きていくことはできたけど、『今チャレンジしないと、この子が大きくなってからではチャレンジはできない』と思い、失敗したら

サラリーマンに戻ればいいや、という軽い気持ちで会社をやめて、起業を決意したんです」

こうして創刊したウェブマガジンがgreenz.jp。鈴木さんは以前の震災での活動をもとに、自分の理想の社会を実現するための第一歩を踏み出した。

「現場に頑張っている人たちを見ていると、貨幣価値ではない何か別の価値を享受しているように感じました。それは、いろんな人とのつながり、信頼関係、新しい出会いなどのさまざまな価値が取り出せるような活動なんです。その素晴らしさを知り、これからの社会は間違いなくそっちの方向に向かっていくと予感しました。2006年の時点では、国内でそういう機運はまだありませんでしたが、確実にそういう方向にシフトしていく、と」

鈴木さんの予感は的中した。特に、インターネットやデジタル技術の革新に伴い、市民の活動が共感を得やすくなった今、クラウドファンディングや中間支援の団体も数多く見られる。また、学生で問題意識を持って起業する人や、それを伝えていこうというメディアも着実に増えてきていると鈴木さんは語る。

しかし、そうした世の中の流れがある一方で、必ずしも皆が社会問題の解決ばかりに目を向けるほど余裕があるわけではないのも事実だろう。大学生も受験戦争を終えたと思いきや、今度は就活戦争とも呼べるような環境に放り出され、何かと切羽詰まった状態におかれている。鈴木さんはそうした風潮をどのように捉えているのか。

「短期的なことが保証されていない社会だけに、長期的なことは考えられない気持ちも理解できます。ただ、既存のルールに乗って他の人と同じことをやろうとすると、どうしても競争に巻き込まれて、結局でかいところが勝つし、体力のあるところには勝てない。そういうことの積み重ねが、今の社会をつくったと思うんです。そういうところに自分から入っていくのではなくて、違う世界でこういう問題を解決したいという目的意識を持って活動していくことで、意外といろんな人からのサポートがあるし、今までつながらなかったような人とのつながりも増えて、良い友達もできると思います」

視点を変えてみると、解決を待たれている問題は世の中にはたくさんある。それらを解決することで喜ぶ人はたくさんいる。何かに取り組むことで、周りの人にプラスの刺激を与えられることもあるし、しかもそれを仕事にして食べていけるという状況は既に始まっているのではないかと鈴木さんはそう語る。

とはいえ、グローバル化した世界を生き抜いていくためには貨幣的な価値も追求しな

ければならないという現実的な問題もある。その二つのバランスはどのようにとったらよいのか、これは現代を生きる多くの社会人が直面する問題である。この点について、鈴木さんはそもそも「どちらかを取る」という考え方自体がストーリーに巻き込まれた思い込みなのではないかと語る。

「多くの人は、経済と本質的な意味のどちらをとるか、どちらに比重をかけるかというように、ひとつのパイをどう切り分けていくかという話になるが、両立という考え方もあると思うんです。資本主義が、今のような行き過ぎた様相を呈しているのはここ100年の話だと思いますが、何千年も前から人間の商売の基本は、世の中に価値を提供し、その対価として、経済的価値を受け取るというものだと思うのです。これは、今も昔も、先進国でも途上国でも変わらない。だから、今の時代でも皆がこういう原点に戻れば、世の中も正常な状態に戻ると思うんです」

では、貨幣価値のためにやりたくないことに人生を費やす—そんな現代の若者が陥りやすい問題に鈴木さん自身はどう向き合っているのだろうか。実は、グリーンズも「やりたいけどお金にならない」ことと、「お金になるけどやりたくない」ことの狭間で悩んだ時期があるという。グリーンズが創設から経営黒字になるまでの5年間のことだ。

「やりたいことはお金にならない、やりたくないことはお金になる。だけど、いかにやりたくないことの中にやりたいことを見つけて、それを意味のあるプロジェクトにしていくかが大事なんです。そう考えて、プロジェクトの意味を自分たちで作り出してきました。最初はやりたくないことが95%、でもそれをしないと食べていけないから、仕方なくやる。でも、だんだんやりたいことの5%が6、7、8、9%...のように少しずつ増えていったような5年間でした。そのとき感じたんです、一見お金にならないようなことでも、それが社会に価値をもたらすものであればお金がついてくるんだと」

「自分のやりたいことをするためには、一方でやりたくないことを我慢するのが必要だ」一般的にはそう思われがちだが、やりたいことと経済的価値が両立できるのならば、これほど理想的なことはないだろう。鈴木さんは、世の中が一種の社会通念ともいう”決まりきったストーリー”に巻き込まれ、思考停止しているのではないかと警鐘を鳴らす。

「そもそも、みんなストーリーに巻き込まれすぎだと思うんです。新興国が台頭している、日本は勝ち抜かなければならない、食料を買い負ける、みたいな。確かにそうい

う側面もあるけれど、違うアプローチで行き過ぎた市場経済に代わる新しい経済をつくっていかないと、永遠にそこから逃れられないし、どんどん苦しくなってくる。昔みたいに、何か新しいことをやろうとしたら対決型になるのではなく、もっと軽やかに、もっとクリエイティブにステキな未来を提示して、それにみんなが共感して一緒に作り上げるような形。そして、それがビジネスにもなっていくという現象が、昔よりはるかに起こりやすくなっていると思います」

静かな千葉の郊外に奥様と2人の子どもと暮らしている鈴木さん。近所の人に薪をもらったり、子どもと自然の中でのびのび遊んだり。そんな彼自身の生活にも、ストーリーに巻き込まれすぎない軽やかさが表れているのかもしれない。
最後に、鈴木さんから学生へのメッセージを頂いた。

「身の回りの環境が日々めまぐるしく変化しており、何かと不安定な世の中だけど、そんな今だからこそ立ち止まらず、学生の皆さんにはどんどんチャレンジしてほしいと思います。自分のやりたいことがわからないという人も、インターンに行くとか、いろんなところに顔出して手伝いをしたり右往左往しているうちに、おのずとやりたいことは定まってくるでしょう。まして、それが世の中に価値のあることだったら絶対社会は返してくれる。大学3年から慌ただしく就活して、内定をもらい就職していくルートでも全然いいんだけど、思考停止になることなく、常に問題意識は持っておいて下さい。就職したその先でやらされる仕事をするのか、自分でテーマを設定して、その中から学びを得ていくのかで全然違ってくるので、やっぱり最終的には自分が信じているところに向かう気持ちを大切にしてほしいです」

【学生のリフレクション】

馬場奇聡

「閉塞感」というネガティブな言葉で捉えられがちな今の日本社会において、社会問題を前向きに捉える手法としてソーシャルデザインやゲーミフィケーションが認知されつつあるというのは、喜ばしいことだと思う。そして、そうした事例を紹介・発信するgreenz.jpというメディアにポスト3.11時代の新たな可能性を感じ、今回鈴木さんにお話を伺うことになった。インタビューの中で最も共感したのが「ストーリーに巻き込まれすぎ」という言葉だ。私たちが、めまぐるしく変化する現代を生き抜いていくために

は、これまでのように凝り固まった”人生の定説”に流されるのではなく、ある意味で空気を読まない生き方が必要なのではないか。「知性とは疑うことだ」とは誰かの言葉だが、定石という成功ルートなんてとっくに存在しない、もとい「成功」の通念すら不透明な時代だけに、自分の嗅覚を信じて突き抜けていくのが、結果として自分にとって、社会にとっても、実りの多い生き方になるのではないだろうか。

小和口真聖

「自分の人生、自分の物語は自分で描かないと他人の物語を歩むことになる」この言葉に私ははっとさせられた。鈴木さんは阪神淡路大震災のボランティアで輝く人々の姿を見て、人間の可能性が最大化する社会を夢見た。そして、その目標を今でも追いつけている。対する自分はというと、東日本大震災のボランティアを企画し、実行し、参加者の輝く姿や被災者の喜ぶ姿を見たものの、それ以上に絶望感の方が大きかった。あと何十年すれば震災から復興できるのだろう、自分たちの活動に意味はあるのだろうか。しかし、これこそ他人の物語に巻き込まれていたのだろう。逆にここで、自分の物語を描き続け、それを信じ続けられることが自分の可能性を最大化することになる。それができるようになるためにも、あらゆる経験や人との関係を、今はつながりのない点のようなものだが、やがては線、そして面へと広げていくべく頑張っていきたい、そう思えるようなインタビューであった。

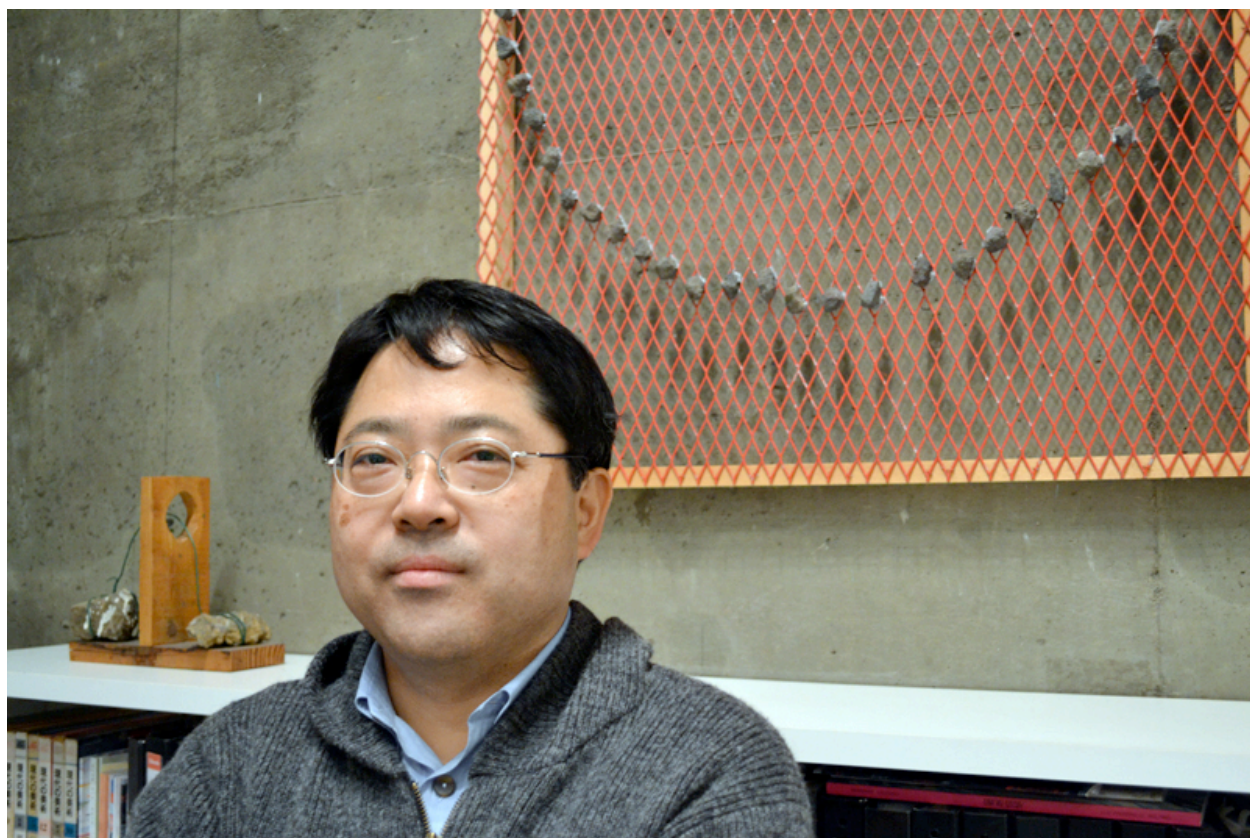
西條柚

大学に入って感じるのは、やりたいことを見つける前にやることを決めねばならない、ということである。高校生のときは大学に入学しているんな授業を受けていれば一生かけてやりたいことが見つかるものだろうと思っていたが、実際は就活のために何をすべきか、留学のためには何が必要か、等今やらねばならないことで手一杯になってしまう。それに対して鈴木さんは、阪神淡路大震災のボランティアの経験を経て人生の大きな目標が定まり、常にその目標に向かってブレずに進み続けている。彼の「ストーリーに巻き込まれすぎるな」というメッセージで、自分がいかに本末転倒なことをしようとしていたかに気づいた。自分は大学入学時の一年前と変わらずまだ自分のやりたいことがわからない状況ではあるが、今回のインタビューは現状に危機感を持った貴重な機会となった。

もっと色々な感情が世の中にあった方がいい

ギャラリスト 小山登美夫

インタビュービデオを見る 



ギャラリストと聞いて首を傾げる人も少なくないはずだ。絵画や彫刻などの芸術作品を、展示会などを通してギャラリーで展示・販売する仕事、それがギャラリスト。今回は、ギャラリストとして村上隆¹や奈良美智²などを手がけ、現代アート界を牽引する小山登美夫さんのお話をお届けする。

みなさん、アートはお好きですか？

ギャラリスト小山登美夫、その面白いことだらけの半生

1963年、東京に生まれた小山登美夫さんは東京藝術大学芸術学科を卒業後、企業的美術館やギャラリーを経て96年に小山登美夫ギャラリーを開廊。現在は、国内外に点在する計4つの自身のギャラリーや渋谷ヒカリエなどで精力的に展覧会を開催しており、他にもレクチャーや審査などを行なっている。

小山さんは、日本いや世界の現代アートを語る上で不可欠なアーティストらとともに世界に羽ばたき、ギャラリストとして世界で知られる地位を確立した。そのような「超すごい」人ながらもたいへん気さくな小山さんの頭の中を覗いてみた。

まずどんな大学生であったか。これが気になる。笑い声を漏らしながらお話が始まった。

「藝祭³の実行委員会を2年間やってたり、美術系の大学を5つくらい集めたサークルで、アート関連のシンポジウムとかを開催したりしてたね。広告とアートをテーマにしたりしていた。他にも映画製作とか演劇の助手とか面白いことをいっぱいやってた、って感じだな。でも最終的にはアートをつくる側に関わっていこうと思った。一般的な娯楽と、それとは少し違うアートとのジレンマを抱えつつも、業界自体が良くなってアートの可能性がない時代だったから、その状況を突破するために違う領域の人の話を聞いて新しいことをしていこう、というところはあったな」

アート界の未来を見据えつつも、自分が面白いと思うことに対し極めて活発に取り組んでいた大学生の小山さん。就職活動についても面白いお話が聞けた。

「自分の将来のことを見据えて、とかは全く考えなかったね（笑）僕、就職活動は1回もしたことないんだよ（笑）2回留年して、1回だけ就職試験も受けたんだけど卒業できなくてダメで。最終的には先輩がいた画廊でバイトし始めたのね。そのままズルズルとこのギャラリーの世界に入ってきた感じかな」

ところで、東京藝術大学に入ったらみんな芸術家になるのでは、とお考えの方も多いだろう。しかし、ギャラリストの小山さんが作品を生み出すことはない。

「ギャラリーで絵を展示して売ってることなんて学生の頃は思いもしないわけ。で、アーティストって無から有を生み出すわけじゃない？もちろん僕は、はなっからそれができない。僕が好きだったのは、いろんなアーティストや作品がある中で、それを批評したり自分が面白いと思うものを判断すること。だからアーティストじゃない立場から、シーンをつくっていくことに対してはすごく興味があったね」

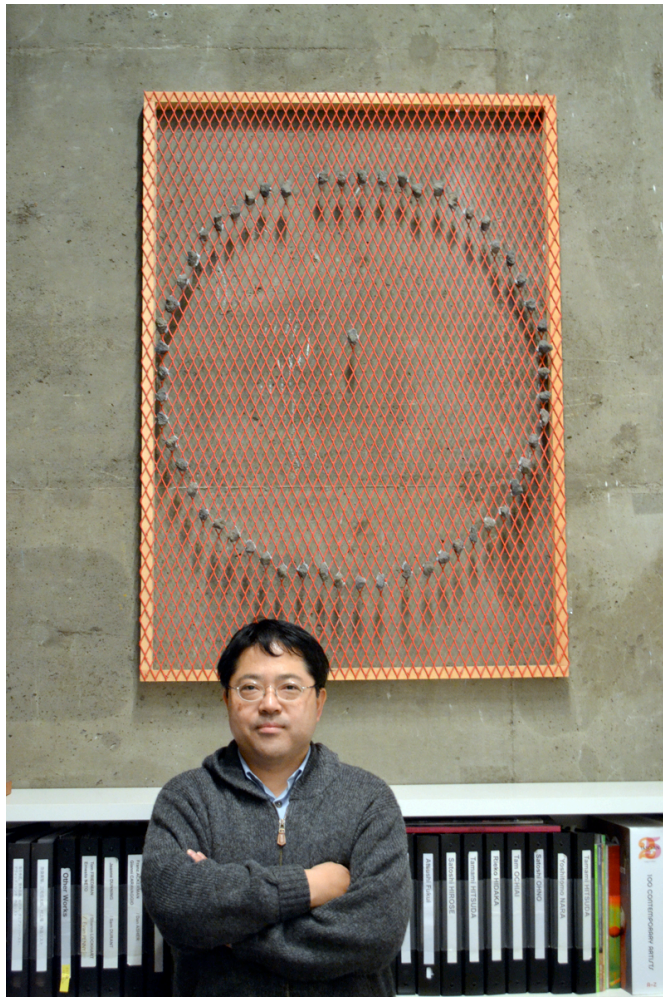
日本の現代アートとは

現代アートのトップランナーにインタビューするとなれば、やはり気になるのはアートの捉え方である。

「日本の場合、いまの現代アートの前身みたいなのは戦前からあったんだけど、伝統的な美術と反社会的なアングラ^[4]の美術とが平行線で続いて来てるのね。だから、美術全体はとても複雑で特殊なものとして存在するから、外から見た人にはよくわからない。現代アートとはこういうもの、とは一概に言えないのね。アートがハイソサエティ^[5]として捉えられてる欧米と比べても日本にはハイソって概念がないし、現代アートを買う大金持ちもいまは日本にはいない。でもその曖昧な日本美術のあり方が面白いって言う人もいるし、今の日本と完璧にリンクしたりもするのよ」

それでは、その難解な日本の現代アートは、今後どのような動向を見せるのだろうか。

「明治時代以前は、アートが生活の中にもっと根ざしていた。だからある意味では日本人はアートと非常に近くもあると思うのね。欧米と違ってクラス^[6]もないし。だから他の地域と比べると、日本には今後、一般的な人が気軽にアートを購入できる市場が立されやすいのかもしれない」



ニワトリと卵^[7]

美術史に残るような才能の原石を発掘し、アーティストを社会に発信していくギャラリスト。彼らはアーティストの何に注目しているのだろうか。

「アーティストに一番求めるのは、現代社会全体のなかで自分が感じていること、見ていることは何なのか、自分は社会のどこにいるのかをちゃんと把握していること。それは、ニーズなどとは全然違う。ニーズなんかマーケットやお金のことを考えている人にまかせておけばいい。それとは違う、どんどん動いていく時代の動向や感情をしっかりと自分に嘘をつかずに取り入れて、それからその取り入れた情報を表現する技術を考えて、制作することが必要。逆にギャラリーはアーティストの作品をどこに繋げていけばいいかを、社会のニーズをしっかりと把握していなければならない」

前節に続き、小山さんはアートの社会性を強調し、そしてこう続けた。アートは、アーティスト、ギャラリスト、アートを鑑賞する人の3者が存在することによって初めて成立する。「ニワトリと卵」の関係のように、3者が三つ巴をなし、互いに影響し合いながらアートは進む。その三角関係の中で、小山さんは作り手と買い手を媒介している。アートという舞台で媒介者を務める小山さんが「ヒト」や「モノ」を媒介する仕事一般をどう捉えているか尋ねてみた。

「一番大切にしているのは、自分たちが目の前でほんとに面白いものを見れるかどうかってこと。あとは歴史をつくりたいという気持ちは持ってるから、自分が関わったアーティストが世間に認められていくことにはやりがいを感じたりするんだよね。ギャラリーの場合は、社会のニーズを考えながらも、最大限面白いものを見せていくことに正直であった方が、最終的には歴史に残るんじゃないかという意識はあるね。簡単なことではないんだけどね（笑）」

フラットでいる

ギャラリーは現代アートと社会をつなぐ場である。経営にあたって気をつけていることは何だろうか。

「コネをつくらない、つまり強力なサポーターを持たないで、フラットにやっぺいこうと思っているんだよね。共犯関係にならないというかな。フラットでいつでも変換可能なように心がけている。たくさんアーティストがいる中で、一人のアーティストを好

きな人たちが、他のアーティストも一様に好きだとは限らないよね。それぞれ好きなアーティストが違うからさ」

この姿勢には現代アートを様々な形で広げていこうとする意思が込められているのだ

学生たちへ

今の学生の印象や学生に向けて何かアドバイスはないか伺ってみると、心から不思議そうに首を傾げた小山さんからこう返ってきた。

「今の学生って結構欲がないよね。金持ち、有名になりたいとかないのかな。そういう欲がないのがよくわかんないなあ。あと、就職活動になんであんなに一生懸命なのかもよくわからないんだよね。最初に入った会社が人生を大きく左右するっていうのが日本の社会なんだと思うんだけど、それでも仕事を自分で立ち上げてみたいとかはもうちょっと思ってもいい気がするよね」

続けてもうひとつアドバイスが述べられた。それは外から日本を試みることだったが、続けて彼はある危機感を口にした。

「これからは日本がもう少しアジアのことを考えていかないと相当やばいんじゃないかって思うところがあるんだよね。都合のいいときは、日本はアジアだといっているくせに、アジアのことはなにも報道しない。いつも西欧ばかりを向いている。自分も反省しなくちゃと思っているよ。あと、ほかのアジアと比べて、いまの日本は金持ちがいない国だから今後どうなるかわからない。もちろん、底力は持っていると思うんだよ、とても勤勉だからね。時代を経てこのようになっていることも分かっている。だけど、最終的な指導力とかはいろんな場面とか見ると不安に思うところがあるよ」

現代アート×社会

中学校3年生の時、小山さんは美術との衝撃的な出会いを果たした。先輩にジャスパー・ジョーンズ⁸⁾の画集を見せられたのだそうだ。最初全くわからなかったが、それでも面白いことだけは直感的にわかった。だからこそ書籍を読むなど自分で勉強した。すると絵の見え方が変わったばかりか、もともと好きだった他の種類の絵も一層面白く感じられるようになった。

また、当時は前衛的なアートや映画や演劇を苦労してでも見てやろうという風潮が残

っていた。何が善で何が悪なのかが一面的には捉えられないという意識が共有されている時代だったのである。

「今ってハリウッド映画にしてもすごくシンプルなわかりやすい構成になっていたりするじゃない。あれもよくわからないよね。もっといろんな感情が世の中にあった方がいいなと思う。例えば戦争は悪いとか言うけど、ついこの間までは戦争でいっぱい相手を殺した人たちが英雄だったし、戦争映画がはやったりするじゃない？戦争が悪いって、そんなに簡単に言えるわけじゃないんだよね。単純になりすぎたりするのは良くないと思うよ。いつも、物事にはいろんな側面があると思う。」

しかし、今テレビでこのような批判をすることは不可能に近い。そこで現代アートの出番である。現代アートの役割は社会に対してある種の批評性を維持できることかもしれないのだ。そして彼は現代アートのもう一つの役割を述べた。

「いろんな解答を宙ぶらりんにすることが可能っていうか、状況を提示することによって、安易な解答を導き出さなくてもいいっていうメディアでもあるかもしれない。それは社会のなかでマイナーであったり、いい意味でローカルである現代アートのいいところだろうね。」

一生懸命何かに取り組むというような実存主義的なあり方に疑問を呈する小山さん。それとは異なるあり方を提示したいという気持ちがある。

「現代アートって生産性がないこととかをたくさんやってたりするのがよかったりするじゃない。今の世の中って普通、意味がなかったり、ポジティブじゃなかったり、生産性がないと怒られちゃうじゃない。けど、ネガティブな感情や、意味のないことも、一つの現実でしょ。そういうのを違う角度から見せてもらうことができる。それが一番面白いんじゃないかな。」

ともすると、アートは社会とは切り離された形で考えられがちである。しかし、本当は違うのだ。現代アートは社会と密接に関わっており、私たちに従来とは違うものの捉え方を提示する役割を持っている。そんな作品たちをギャラリストとして社会に示す。媒介するという彼の仕事を助けに、私たちは社会の中に「色々な感情」を取り戻していくべきだろう。

【学生のリフレクション】

井手佑翼

小山さんのインタビューの中で、私の印象に残った点は大きく分けて二つあった。まず一つは学生時代の活動に関するお話で、将来のことは何も考えず、その時に面白いと思ったことをやっていたとおっしゃっていた点。将来希望する仕事から今すべきことを逆算するのではなく、自分の置かれた状況の中でただ面白いと感じたことに打ち込む。そういった姿勢で一つ一つの物事に取り組めるとは、なんて素敵なことだろう。

そして二つ目は一見芸術的な作品を取り扱うだけに見えるギャラリストという仕事の裏に、現代世界に向けた鋭い洞察や思想があったという点だ。インタビュー時間や紙面の都合上この点について十分深めることはできなかったが、文系の学生としては、こうした深い教養を持った方に出会うことで、もっと多くのことを学べと励まされているようにも感じた。

大谷啓人

私が感動したのは、小山さんのアートに対する姿勢である。ギャラリーを芸術的なレイアウトにしていることはもちろん、インタビューの最中にアートの話になった際には小山さんの声に真剣味が増したような印象を受け、さらに小山さんの言葉は流れるように出てきた。小山さんにとってアートがいかに大切な存在であるかを肌で感じることでできたインタビューであった。

「好きなこと」を仕事にできる以上のことはないが、それを体現する小山さんのお話を伺って、常に自分の価値観に正直になって「好きなこと」を追求することは、忘れがちなながらも、人生の中で最も大切に幸せなことのひとつなのだろう。社会的・経済的成功と、自分が絶対に譲れない部分との兼ね合いは、これから先もじっくりと考え続ける必要があるようだ。

京極周

小山登美夫さんは現代アート界で腕利きギャラリストと聞いていて、一体どんな方なのだろうと少し物怖じしつつも非常な好奇心を抱いて小山さんのギャラリーに向かったのだが、一目見たその瞬間からとても人当たりが良い方だと感じた。全身から漂うオーラがそう語っていた。

お話も当然の如く面白かった、学生時代から自分の興味の赴くままに様々な分野に手

を出していたそう。でも優しい風貌のこの人物をつくっているのはたくさんの時間をかけて蓄積された膨大の知識と努力だと思った。好きなことをやっていれば良いという単純な話ではない、その知識が実際にアーティストや顧客とのコミュニケーションツールとして役に立っているのであろう。どの世界に進むことになっても勉強し世界を広げること、そしてそれによって自分自身を理解することが大切なのだ。僕もこんな魅力的な人になりたいと思った。

小林夏美

小山さんの最後のお話がとても印象に残っている。これまで私は進振り制度という特異な制度の中、1年生の頃から必死に点数計算をしてきた。そしてこれからは、息のつく間もなく3年生の冬から就職活動に勤しみ、あっという間に卒業となるのだろうと思ってきた。だから私はこれまでサークルにしるぜミにしる、何か「将来」に役立ちそうなことばかりを選定してきた。例えば美術鑑賞が好きと言っても、それが教養になるという思いがどこかしらにあったのである。そういう一面的な捉え方ではなく、今後は多面的に物事を捉え、もっと自分の中の複雑な感情を大切にしていきたい。

そんな思いに気づかされたからか、以前よりは現代アートの魅力に素直に近づけたような気がする。

1. アーティスト。代表作"My Lonesome Cowboy" が約16億円で落札されるなど、現代アートをリードしている。 [↩](#)
2. アーティスト。大きな目をした女の子の作品などで世界的に知られる。2012年4月現在、熊本にて個展を開催中。 [↩](#)
3. 東京藝術大学の学園祭のこと。 [↩](#)
4. 「アンダーグラウンド」の略。地下活動など。 [↩](#)
5. 地位、経済力、教養などにおいて社会的に上層に位置するとみなされる階層によって構成される階級。上流階級。ハイソ。 [↩](#)

6. ここでは「階級」の意。 [↩](#)
7. 「ニワトリと卵のどちらが先にできたのか」という因果性に関わる問題。 [↩](#)
8. 20世紀に活躍したアメリカの画家。星条旗をデフォルメした絵などで知られ、ポップアートの先駆者となった。（Wikipediaより） [↩](#)

世界平和と自分の幸福

世界銀行 西田一平

インタビュービデオを見る 



「社会貢献」と聞くと皆さんはどのような言葉を連想するだろうか。ボランティア、善意、慈善事業などの言葉を想像する人が多いかもしれない。しかし、世界銀行の西田一平さんは全くの違った考え方を示してくれた。

「自分の幸せを犠牲にした社会貢献は成り立たない」

その言葉の真意とは。そして、民間企業就職、大学院進学を経て世界銀行に入行したという経歴を持つ西田さんに、自分のやるべきことを見つける秘訣とは何か、お話を伺った。

自分が面白いと思えることを探して

早稲田大学国際教養学部卒業後、野村證券株式会社に入社するも3年後に退社。その後、政策研究大学院大学に進学。大学院卒業後、世界銀行に入行し、現在に至るという様々な経歴を持つ西田一平さん。現在は世界銀行で開発関連部門に所属している。西田さんは、学生時代から「開発」という分野に関心があったのだろうか。

「大学生の時は特に開発分野に興味を持っていませんでした。今の仕事とは全然違う、経営学の方に興味がありましたね」

大学時代はまだ自分のやりたいことを決めきれていなかったという。それでは学生時代をいかに過ごしたのかを尋ねると、これまた意外な答えが返ってきた。

「世界の問題について話し合うとかいう、意識高い系のサークルに入っていたわけでもないんです。学生時代は友人と麻雀したり、サークルでチャラチャラ遊んだりしてばかりいました。とてもじゃないけど僕の学生時代は人様に自慢できるようなモノじゃないですよ(笑)」

しかし、大学生活が遊び漬けだったわけではなかった。大学時代にやっておいて役立ったこと、それは読書だという。

「本だけは、たくさん読んでいましたね。特に顕著だったのは留学した時です。大学時代の1年間、オーストラリアに留学をしていたんですが、僕が行った町は本当に何もなくて…(笑)。スポーツか勉強くらいしかすることがなかったです。だから、大学の図書館に一日中閉じ籠もって様々な日英の書物を読んだりしました。ここで蓄えた知識は後々役に立ちましたね」

大学卒業後、西田さんは野村證券株式会社に入社。しかし、数年後に西田さんは会社を退社する。会社での仕事に面白さを感じられない、というのが主な理由だった。

「本当に好き嫌いの問題なのですが、僕は前の仕事をしていてもそれほど幸せに感じられなかった。だからとにかくやめて、次のことをやろうと考えていたんですね」

一度就職した企業をやめることは、勇気がいることかもしれない。だが西田さんは自分の気持ちに素直に従い、別の道を探すことにした。その後、西田さんは再就職ではなく大学院進学を決める。その理由を尋ねてみると次のような返事が返ってきた。

「会社を退社後、すぐに他会社に就職することは考えていませんでした。それより、自分のやりたいことを模索するモラトリアム期間が欲しかった。大学院に進学を決めた理由は、あれこれ模索をする猶予期間を得るため。消極的な理由でしたね」

大学院に入ればやりたいことが見つかるかもしれない。そう思って文系の大学院進学について調べていくうちに、西田さんは国際機関というものを意識し始めた。

「調べていると、国際機関は文系でも修士号が必須だということがわかりました。文系の修士号取得がキャリアパスに繋がることを知って、国際機関で働くのも面白そうだと思い始めました」

Jeffrey David Sachs著「The End of Poverty: Economic Possibilities for Our Time(邦訳:貧困の終焉—2025年までに世界を変える)」などの本を読んでいく中で、現在扱っている「開発」に興味を抱くようになったという。

「途上国の成長の度合いを見るのがとても面白いと思いました。先進国の成長の具合というのは微々たるものじゃないですか、GDPでいうと数%という具合に。でも途上国の成長度合いは違う。GDP数十%上昇のレベルなんですよ。」

僕は、この途上国の成長に関する伸びしろの大きさに魅力を感じたため、開発というものに興味を持ち始めました」

日々刻々と変わっていく途上国を見るのが面白いと考えて現在の仕事に興味を持ったという西田さん。

「少なくとも僕はアフリカの貧しくて飢え死にしそうな子供たちを見て涙が止まらないから、という理由ではなかった。どちらかというともっと個人的な理由でしたね。途上国の経済について研究するのは、面白そうだったんです。」

自分が面白いと思うことをやりたい。その思いを頼りに、1度民間企業に就職した後、大学院に入り直し、世界銀行に就職する道を選んだ西田さん。様々な道を模索した上で、世界銀行で開発の研究がしたいと考えるようになった。

しかし一方で世界銀行入行まで道のりは決して単純なものではなかった。

「世界銀行に入りたい人は世界中に数多くいる。その中にはハーバード大学出身者などの強者もいます。僕が彼らと対等にやりあったら絶対に勝てないと考えていました。なので、そのような人と同じ土俵で勝負をするのではなく、彼らを飛び越えられるように、迂回路を探りに探りましたよ」

西田さんの通っていた大学院の教授の中に、世界銀行の上層部と繋がりのある人が何人かいた。西田さんは、彼らと日頃からよい関係を保ち、空きポストが出たら自分のCV(=履歴書)を上層部に直接送ってもらうよう、片端からお願いして回った。自分のス

キルや能力に磨きをかけるだけではなく、人のつながりも大切にした結果、西田さんは見事世界銀行入行を果たした。

論文から始まる社会貢献

世界銀行での仕事は、発展途上国に融資するいわゆる「銀行」としての役割と、学術的な研究組織の2つに大別される。西田さんは後者に所属しており、マイクロファイナンスが途上国に与える影響をリサーチし、論文を書いている。マイクロファイナンスとは、担保を取りにくかったり、通常の銀行が融資するには少額すぎたり、また貧しいために信用が足りないが、やる気のある人々にお金を貸すビジネスの形式であり、貧困削減に効果があると期待されている。

「貧困削減を目標に掲げる世界銀行」と聞くと社会貢献を連想する人は多いと思うが、論文を書く仕事から社会貢献というワードを連想する人は少ないかもしれない。西田さんの仕事は、実際にどのように社会の役に立っているのだろうか。

「『マイクロファイナンスがあれば、信用が弱い人たちも金融アクセスができて、ビジネスを始めやすいようになり経済がもっと回るようになるので、貧困削減効果がありそうだ』ということは誰でも想像できることだとは思いますが、でも、言葉のロジックだけでは、『そりゃあ言葉の上ではそうだけど、本当かどうか、はっきりとはわからないよね』という議論になりがちで、根拠として弱い。政策を決定する際に官僚が使用できるような、確実性のある証拠にはなりえないんです。

子供がお母さんに『みんなゲーム機を持ってるから、僕も持っていないと仲間はずれにされちゃうよ』と言葉だけでいっても、なかなか説得力を持たないのと、原理は同じです。

そこで、マイクロファイナンスを実施した場合としない場合で、実際にデータを集めて数値を出すことで信ぴょう性をあげることが論文の存在意義なんです」

論文の目指すべき目標は、ただ論文として評価され、ジャーナルに載ることではない。途上国など現場で貧困削減に取り組んでいる人々に利用してもらうことが第一であり、それでこそ、世界銀行が金融機関とリサーチ機関という2つの役割を持ち合わせている利点を生かせると西田さんは語ってくれた。

「途上国の政策決定者が、どのような経済政策を採るか決める際には、確たる根拠が必要です。僕が提供している論文は客観的な根拠の一つであり、為政者がよりよい政策にハンコを押しやすくするための判断基準のツールなんです。このために論文は使われるべきだし、これを目指して論文を書いています」



今の仕事が好き！

1度民間企業に就職したのち、大学院を経て世界銀行に就職された西田さん。自分の好きなことや、やるべき方向を見つけるためには、民間企業から視点を変え、今までとは180度違う社会貢献にも目を向けたことが重要だったと振り返ってくれた。そして、その結果、やっと心から好きと思えるリサーチの仕事に出会えた。

西田さんにとって今の仕事は、「社会貢献をしている実感」より「好きなことをしている実感」の方が強いという。

「リサーチは自分に向いているし好きだったので、仕事をしていてもストレスが少ないから、生きるのが楽です。社会人になってから日曜日の夜ってものすごく憂鬱だったんですよ、次の日から5日間仕事だから。でもそれはなくなった。そんな仕事が僕にとっては今のリサーチの仕事だったんですね」

今現在、自分の好きなことがまだわからない、どうやって好きなことを仕事に繋げていけばわからないと悩む人も多いただろう。仕事を決める時に考えればいいや、と漠然と考えている人もいるかもしれないが、「好きなことをやる」という姿勢は、専攻を決める際にも大切だと西田さんはいう。

「国際機関で働きたい人の中には、『なんとなく、役に立ちそうだから』という理由で『国際○○』という専攻分野に決める人も多いと思います。でも、僕はそれをおすすめしません。なんとなく幅広く学んでも身につかない。それよりも、自分が興味を持った分野を突き詰める方が、やっていて楽しいと思います」

マニアックな専攻にすると、就職先が狭まるのではないかと不安に思う人も多いかもしれない。しかし、実際は一つのことを突き詰めた人の方が有利になるという。

「国際機関で人を採用する時、採られやすいのは『国際関係論』を学んだ人よりも、『地方銀行のことなら何でも聞いて！』というようなエキスパートなんです。後者の方が、何をやってきたのか明確で、即戦力になりますからね。そういう観点からしても、やはり自分の好きなことに絞って専攻を決めた方がよいと思いますよ」

現在の仕事について熱く語ってくれた西田さんだが、将来については、どのようなビジョンを持っているのだろうか。

「今は全世界を対象とした論文を書いているのですが、今後はもっと地域や国を限定して、その場所に特化した論文を作っていきたい。そうすることによって、より意思決定に携われるようになると思うんです。全世界向けの論文って、守備範囲が広いようで、実はどの地域にとっても具体性がないから、活用しづらかったりする。例えばインドのある特定の村に関する論文を書けば、その地域の人たちが政策決定する際に非常に参考にしやすい。そういう風に、自分の論文がもっと活用されるようにしていきたいです。今の制度では、自分の論文が誰にどのように参考にされているのか、なかなかわからないのが現状です。論文を書いている僕たちが、現場の人たちともっと積極的に関わって、役に立てるようになったらいいなと強く思います」

世界平和と自分の幸福

論文を書くという側面から、途上国の貧困削減に取り組み、社会貢献に携わっている西田さんだが、研究をしている時に社会貢献をしている実感があるか尋ねると意外な答えが返ってきた。

「今は自分の好きなことをしているという実感の方が強いですね。僕は善意からの社会貢献には懐疑的なんです。自分はただ、やっていて楽しいリサーチの仕事をしているだけで、それが最終的には社会の役に立っている。そういう貢献の方が長続きすると思います。」

全員が全くの善意から社会貢献する。それは一つの理想形かもしれない。だが、自分の幸せを犠牲にしてまで社会貢献はできないと考えたり、全くの善意だけで社会貢献するほどのモチベーションはないと思ったりする人も、多いのではないだろうか。西田さんは、「自分にとっては、世界平和より自分の幸福の方が大切だ」と語る。

「自己犠牲とか、善意とかだけに依拠した社会貢献って、長続きしないと思うんです。人間の価値観って、案外ぶれやすいものです。大きなイベントが起こると、すぐにひっくり返ってしまう。だから、人間の善意に依拠した社会貢献って聞こえはいいけど、実はとてもリスクが高いんです。それよりも、儲かるからみんなが社会貢献をする、というシステムの方がずっと長続きする」

具体的にどのようなシステムにすればよいかは、明確な答えはまだ誰も出すことができていない。この難解な問いに対し、西田さんは、適切なインセンティブをしっかりと作るのが大切だ、と答えてくれた。善意や犠牲を強いたりせず、個々人が自分の好きなことをやりながら、結果的に世界がよくなるというのが理想形であると熱く語ってくれた。

「僕が世界銀行で研究をするのは、世界を良くしたいという高尚な考えよりもまず先に、研究が楽しいから、というのがあります。伸びしろの大きい発展途上国がぐんぐん成長していくのを見るのは楽しい。だから研究する。そしてその研究がよりよい政策を選ぶ根拠になったら嬉しいです」

【学生のリフレクション】

岡ゆづは

「世界の平和より自分の幸福の方が大切」西田さんはとても率直に、ご自身の仕事や社会貢献に対する考え方を聞かせてくださった。社会貢献というのは、自己犠牲をもと

に行う慈善事業でなくてよいのだ。私も、自分の心に素直に従って、好きな仕事をしながら社会に貢献したいと思う。

城所和樹

世界貢献を志向する国際機関に入る人は皆、学生時代から相当高い志を持っているのだろうと考えていた。しかし、西田さんのように、そうでない人もいることがわかった。個人的にはこの点に新鮮味を感じた。また、学生時代に考えてもいなかった世界銀行で現在働いているという西田さんのエピソードから、何が起こるかわからないという人生の醍醐味を垣間見ることができたように思う。

鈴木花奈子

自分のやりたいことがすぐに見つからなくてもいい。西田さんのご自身の経験も踏まえたそのメッセージがとても印象に残った。合わないと思ったらやめる勇気、そして今までとは違う視点で物事を見られるようになることを心がけられるように自分もなりたい。また、社会貢献は必ずしも気張って行う必要はないという考え方は、私にとってはとても新しかった。自分の好きなことを仕事にでき、その上で社会貢献もできている西田さんの現在の生き方は、進路を迷っている多くの人にとっての指針の一つになると感じた。

やってみようか、の連続が一つの軌跡を描く

建築家 伊東豊雄

インタビュービデオを見る 



王立英国建築家協会RIBAロイヤルゴールドメダルや、ヴェネツィアビエンナーレ金獅子賞など多数の受賞歴を持つ世界的に著名な建築家、伊東豊雄さん。意外なことにこの業界で生きていこうと思ったのは大学生になってからだという。無名の存在から着々とキャリアを積み上げていき、今や建築界においてその名を知らない者はいないまでの存在になった。そんな伊東さんに、建築と生きた半生を振り返ってもらおうと同時に、3.11を機として伊東さんの建築観がどのように変化していったかを語って頂いた。

建築とは何なのか…見つめ直す時がきた

「建築家は建築を何のために作っているのだろうという一番基本的な精神を疎かにしてきました。今回の震災を機にしてそのことをしっかりと考えようと思うのです。」

3.11を境にして伊東さんの建築観なるものは変わったようだ。あの日は大事な式典を目前に控え、翌日には東北に入る予定だったという。

生憎の地震によってこの式典の執り行いは中止になってしまったが、伊東さんはその後足繁く東北へ赴き自身の作品である施設の再開に向けて準備を進め、その傍らで被害の激しかった地域へも通い詰めた。そのような体験は、兼ねてから感じていた建築への思いを再び想起させるきっかけにもなったという。

人とのふれあいを忘れずに～作中に流れるコンセプト

そして持論として具体的な建築の今後あるべき姿を語ってくれた。

「今考えているのは被災地を支援するのではなくて、そこにつくるものこそが日本全体を変えていくような、そういう未来の街・未来の建築を生み出したい。こういう機会にすごくリスクは大きいけれども大自然と向かいあって、人と人とのつながりをすごく大事にしてきた被災者の方々と話して、そこから学んだことをベースにして社会の仕組みを考えたり、あるいは建築と一緒に考えていくと僕らの元気になるし新しい刺激になる、と考えています。」

では被災地の建築をどのように築き上げていけばよいのだろうか？

「自分が公共建築を作るとなると、制約が付きまとい、ありきたりのものしかできない。どうしたら外れたものが作るかということを考えている。被災地で同じことが考えられている。『安全のために高台へ移住しなさい』と声高に叫ばれる。そう簡単に今まで住み慣れた土地を離れられない。歴史とか伝統とかを全部消してしまっているのか？近代性というものが、ここにきて飽和状態に達し、何も新しいものを生み出さない状態になっている。被災地にも近代を持ち込むのか？それをなんとかしなければこれからの日本はない。」

また「今の東京では建築を作りたいとは思わない」とも話す。

「東京ではそれぞれの活動間に距離があって、ある瞬間に個別の場所に集まって、熱狂的に一瞬関わり合うことはあるけれども、その後すぐに解散ということが多くある。東北では住んでいる地域という小さなコミュニティが重なり合っているけれども、今の東京ではそれが感じにくいですね。」

「リスクは大きいけれども大自然と向き合い、人と人とのつながりをとても大事にしてきた被災者の方々から建築の作り方を学んでいくべきなのです。」とも話すように、人同士がふれあう空間を大事にしてきた伊東さん。そのような伊東さんの思いが結晶し

た建物がある。被災各地に建てられた「みんなの家」だ。ここには震災で自宅を失った人々がふれあえる空間要素が満載だ。

「コンテナのような仮設住宅に住む被災者の方々は隣の人と砂利道の上で話すしかない状況にありました。共に食事をしてお酒を飲みながら話しあえる家を作ることくらい僕ら建築家の力でもできるんです。今年も新たに数軒みんなの家が出来上がります。どんなに小さくともそこから建築は誰のために何のために作るのかということを考えるきっかけになるようなものを作っていけたらと思っています。」

加えて伊東さんには建築設計の段階においてもこの「ふれあい」を大事にするという信念が貫かれている。

「どんなに小さい住宅を作るのでも建築は一人ではできない。いろいろな関係性の中で作ることが建築の面白さなんです。その中でもとりわけ面白いのが人と一緒に話しながらそこから何かが生まれてくるところですね。」

熱く議論を戦わせることを抜きにして伊東さんの建築は完成しえない。

全てを投じて何かに打ち込む機会を

伊東さんは学生だった頃、将来に対していかなる煩悶を抱え、いかなる思いで日々を送っていたのか。それを知るために、どのような経緯で建築家となったのか伺ってみた。

「大学受験で、浪人の夏に理系に鞍替えしました。その時もまだ建築家になろうという考えはなかったんですが。そして大学2年生で学部を決める時、行ける学部が限られる中で、はっきりとした考えのないままに建築学科に進学しました」

現在、これだけ名声ある建築家として世界中で活躍されている伊東さんも、学生の頃から建築を志していたわけではないという。いったい何が彼を建築の世界へと導いたのだろうか。

「大学4年生の夏に、その頃気鋭の建築家として活躍していた菊竹清訓さんの下で、一か月アルバイトとして働いたんです。アルバイトの最後の日、『来年からここで働かせて下さい』と頼んでみたら快諾してくれました。一生のうちで一番体力を消耗した期間だったけれども、建築家人生を支える経験になりました」

「絶対おれの方が良い」くらいは言わないと

建築家としてのルーツが、大学卒業後に勤めた菊竹事務所での、懸命に建築に打ち込んだ経験だということが分かった。当時の自分と今の若者を重ね合わせて、伊東さんは何を思うのか。

「事務所の若い人たちを見て、一つ僕らと違うなと思うのは、自分が若い頃はもっとたくさん議論してきたということです。若い建築家同士、有り余った時間で酒を飲みながら、『お前の作っているものなんかどうしようもない』ということと言い合っていました。ところが今の人、事務所の中でこれからの建築について議論をけしかけても、生に話をするのがしにくい」

伊東さんの回想する往時の若者像は、確かに今日の社会では見出されにくくなってしまったもので、そのような若者の不在を寂しみ、不安視するのは彼ばかりではないだろう

「今的人是自分の中で論理が完結しているんですよ。もっと人に話す、問いかける中で次のステップが生まれてくる。『絶対おれの方が良い』ということくらいは言わないと。それに対して自分が責任を持たなくてはいけなくなるから」



最大限これしかないという選択をしていたら後悔はない

それでは、先行きの見えない現代において、今の学生はいかに将来を模索していくべきなのだろうか。

「自分の中で“こうあるべき”という一つの将来像を作ってしまうといけない。枠を取り去って見たら、いくらだって一人で好きなことをやっているといると思う。自分の生き方を振り返ってみても、一つの分岐点で違う方向に進んでいたらどうなっていたか。そういうことは本当に分からない。数ある選択肢の中で、最大限これしかないという選択をしていたら後悔はないと思います」

「なんとかなる」という思想を標榜する伊東さんは、既成の将来像に固執するのではなく、好きなことにどんどん手を出すべきだ、と説く。将来をはっきりと予測することは誰にもできないのだから、一つ一つの選択に真剣に向き合うことで、後悔のない未来を選び取ることができるということを教えてくれた。

“設計”は社会を見るファインダー

では、そんな分かれ道の中出会った“建築家”という仕事について、伊東さんはどう考えているのだろうか。

「働いている意識はほとんどないですね。働くというより、自分の問題意識・思想を突き詰めていきたいとずっと考えていて。設計は僕にとって社会を見るファインダーを覗いている感じです。“設計”という具体的な問題を通して社会を見ると、経済や現代科学などいろんな問題が全て関係しているの。」

設計は世界を見る目を養うようなもの、という。なぜ、そう言えるのだろうか？

「一人でできないんですよ、建築を考えるのは。そこがアートと違うと思っています。小さな住宅一軒を作るとしても、スタッフたちとまず共同作業しなくてはならない。クライアントと話さなくてはならない。コストの問題もある。例えば、今回こういう建築かな、というイメージを人と話していると、自分の考えていたようにはならない場合が多々ある。でも、そこで『それならこうしよう』、『これなら、こうしてみよう』と、紆余曲折を経て考えもしなかったようなものに到達するのが僕にとってすごく面白い。建築やって一番面白いです。人と一緒に話しながら考えながら、何かが生まれてくるというのが建築特有の思考方法であり、興味深いことだと思っています。」

建築は関係の中から生まれる。だからこそ、一緒に考えられる人・やれる人をどれだけ集め、その人たちをどうプロデュースしていけるかにかかっている、ともいう。では、夢やしたいことが見つからない場合はどうしたらいいのだろうか？

やってみようか、の連続が一つの軌跡を描く

「見る前に跳べじゃないけども、夢っていうのは入り込んでいった時に初めて見えてくるもんだと思う。僕も新しいプロジェクトの依頼を受けた時に結構考えるんだけど、最初は本当に雲みたいなもんなんです。それで、こういうことやってみたいなと思っているうちに、少しずついろんなものが見えてきて。それが最後『よし、これでいけるぞ！』みたいなものになっていく。そのプロセスこそが面白い。はっきりした夢を持つのもいいけど、100人いたら99人はそういうことは見えてない人だと思うから。ただ、そういう時に一つ自分で仕掛けていくと、いくつかのことが見えてきて、そこから、またいくつかのことが見えてくる。だから、僕は夢という形で目標が見えたことはあまりないです。『こういうことやってみようか。』その連続が結果的に一つの軌跡を作っている、という気がします。」

「やってみようか」で始まった雲のような考えから、少しずつ形が見えてくるプロセスが面白い。ならば、何がしたいか分からないという理由で何もせず立ち止まっているのは、もったいないことではないだろうか。たとえ先行きが雲のようにつかみどころがなくても、動き出したら思いもよらないところに辿り着くかもしれない。そう、伊東さんは背中をおしてくれた。さあ、見る前に跳べ。

【学生のリフレクション】

梅里亮介

学生である私たちは、将来に対してぼんやりとした不安を抱えて、日々暮らしています。「今学んでいる学問は、本当に自分のやりたかったことなのか」「就職先は無事に決まるだろうか」「将来、私は何になっているのだろうか」……。これら全ての疑問を解消する、魔法のような言葉は存在しないでしょう。しかし伊東豊雄さんの言葉は、未知なる社会を目と鼻の先に予感して立ちすくむ私たちに、気楽に、そして前向きに、明確な指針を与えてくれました。

また私自身、著名人にヒアリングを行い、その内容を電子書籍にまとめるというこの一連の活動を通して、かけがえのない出会いに恵まれました。伊東さんは、建築にはふれあいの精神が必要だと語ってくれましたが、これはどんな分野にも通じることだと思います。周囲の人と関わり合うことで一つのものを作り上げる。——「働くこと」を越えて、「生きること」の意味を、伊東さんは教えて下さったように思います。

櫻井一彬

今回お話を伺って最も強く感じたことは、伊東さんの視点が常に他者に向けられていたということです。芸術家ともなるとその作品の独自性が独り歩きして観るものにはなかなか理解できないなどという話はよく聞きますが、今回ばかりはその考えは違いました。世界に誇れる建築家とだけあってもその思想は決して専門的で難解なものではなく、貫かれた作中のメッセージは驚くほど人々の内面に寄り添ったものでした。「ふれあいの場」として作られた伊東さんの数々の作品には、今の世の中をより良くしたいという伊東さんの強い思いがにじみ出ているように感じましたし、大震災後も現場にこだわり何度も被災地に足を運んで人々との対話を大切になさってきたそのおごらない謙虚な姿勢にはただただ敬意を表すほかありませんでした。後進の育成にも力を注いでおられると伺って、たくさんの有能な後輩が伊東さんのもとから巣立っていかれることを祈念しつつ、私自身社会貢献のありかたについて改めて自問していこうと思いました。

潘嘉敏

今回伊東さんとお話をしてみて、とても“関係”を大切にされている方だと感じました。人と人との関係はもちろん、そこから生まれるアイデアや会話、建築と人との関係、建築と自然の関係……。本文でも触れていますが、こういった様々な関係が重なり合って、思いもよらない何かにめぐり合う・何かが生まれる、その魅力と面白さを実感したインタビューでした。この記事も、ある4人が偶然集まって出来上がったと思うと感慨深いです。

また、個人的にはやってみようかの連続が人生になっていく(一つの軌跡を描く)というお話が特に印象的で、明確な夢を持っていなくても「一つ一つの経験を大切にして歩んでいけば大丈夫」だと勇気づけられました。私も一つ一つの関係・経験を大切にし、積極的にいろいろな物事に飛び込んでいけたら、と思います。

松井大樹

今回のインタビューで一番印象に残った伊東さんの言葉は「見る前に跳べ!」です。伊東豊雄さんのような、現在、世界的建築家である人ですら、若い頃に目標として明確に夢を持っていたのではないことには驚きました。「“こういうことをやってみよう”の連続が、人生の軌跡を作ってきた」という伊東さんの言葉は非常に印象的です。これまで、自分も含め「やりたいことが見つからない」「ゆめが見つからない」ことに悩む友達は多くいました。しかし、いくら悩んでいても、結局何もしないまま終わってしまっは元も子もありません。「夢というのはそこに入り込んでいった時に初めて見えてくる」という伊東さんの言葉に示されるように、跳んでみなければ、夢も目標もいくら経っても見えてこない。働くことやその中で社会貢献する意義を今、明確に見出すことはできません。しかし、見る前に跳んでいった結果、一つの人生の軌跡が作られ、その意義は自然と浮かび上がって、見つかっていくのだと思いました。

「外と向き合うことは内と向き合うこと」

講談社 近藤大介

インタビュービデオを見る 



「私たちは、『グローバル』の世紀を迎えました。今や世界中の物流、サービス、経済が連動し、インターネットは地球の裏側の情報を即座に伝えます。フェイスブックで海外の友人たちとつながることも容易になりました。私たちの世界はますます狭くなっています・・・」

このようなことを耳にしたことがある人は多いだろう。「グローバル」は今とこれからの時代を語るうえで欠かせないキーワードだ。当然、私たち世代の「働く」は「海外」と今以上に接点を持ち始める。しかし、言葉では理解しているこの「グローバル」、その実際をイメージできない人がほとんどではないだろう

か。来るグローバル時代に向けて、私たちは海外とどのように向き合っていけばよいのだろうか。今回インタビューしたのは、日本、中国、韓国をまたにかけて活躍する記者、近藤大介さん。「海外」に興味があるという人、最近よく聞くからなんとなく気になるという人、必見である。

東京メトロ護国寺駅の出口を出ると、すぐ手前に見える高層のビル。今回のインタビュー場所、講談社本社だ。ロビーに入ると右手には講談社出版の書籍だけを取り扱った本屋がある。「進撃の巨人」、「悪の華」など今を賑わすコミックや、「群像」や「週刊現代」など歴史ある雑誌が立ち並ぶ。出版社の雰囲気が肌で感じられ、思わず気持ちも舞い上がってしまう。

今回取材をさせていただいたのは、週刊現代編集次長として活躍されている近藤大介さん。編集の仕事の傍ら、自身も記者として「講談社現代ビジネス」(日本語)、「経済観察報」「看天下」(中国語)、「アジア・インベスター」(韓国語)など、日中韓で連載を抱えている。2009年から去年の夏までは講談社北京で、講談社グループの本を中国で出版する、その版權を通り扱う仕事をなさっていた、まさしく国際人である。

きっかけは、衝撃

海外で働くと聞くと、明確な目標があって、よほどの覚悟で、ということをつい想像してしまう。しかし、近藤さんは当初から海外と向き合って働くというビジョンを持っていたわけではなかった。

「最初はね、どういうジャーナリストになりたいみたいなものではなくて、ただただ記者になりたかった。で、当時はバブル景気で東京が華やかだったから、東京でジャーナリストをやりたかったんですよ。でも新聞社とかテレビ局だと若いうち十年は地方勤務だった。だから東京で仕事のできる雑誌社を選びましたね。」

富のあるところにもものは集まる。当時、バブルで盛り上がる日本には世界一流のものが集まった。プロスポーツ、オペラ、美術、セレブ・・・その時世界の中心は東京にあったといっても過言ではない。だから近藤さんは東京にこだわり、講談社に入社する。しかし、その直後に転機が訪れる。

「僕、89年入社なんだけど、入社して初めての仕事が天安門事件の取材だった。そこで驚いたわけ。同じ若者でも、日本は好景気で皆勉強もしないで遊んでいるのに、か

たや中国の若者は民主化を求めて運動している。それまで中国はよく知らなかったんだけど、それが衝撃的で、興味を持ちましたね。」

ハードルは当然、ある

「衝撃」から、中国に興味を持ったという近藤さん。しかし、興味だけで果たして中国に勤務したり、中国語での連載を抱えたりと異国で活躍ができるのだろうか。その過程には何か障害のようなものはなかったのだろうかと考えてしまう。

「ハードルは、そりゃありますよ。例えば文化の壁。中国は日本ほど親切な国ではないんですね。コンビニに行ったら、お札は偽札鑑定機にかけられるは、お釣りは投げられるわ。お弁当をあたためてくれるなんて日本だけです。それにタクシーに乗ったら、運転手は漫才を聞いていて全く集中していない。だから初めのうちは中国が嫌いになっちゃう。毎日、タオイエン、タオイエン（もうやだ、もうやだ）って言ってました。」

適応するために何か特別な方法があるわけではない、と近藤さんは語る。

「だから、海外経験の長い先輩に相談したんです。そしたら、『近藤君、中国に来る日本人は四つの時期を経るんだ』と。一つ目は驚愕期。ただただ日本との違いに驚く。二つ目は嫌悪期。さっきいったみたいに中国が嫌いになっちゃう。で、三つ目が学習期。中国ってこういう国なんだってのが段々学習していく。そして最後に適応期がくる、と。実際その通りで、僕の場合は四季のサイクルでこの四つの時期を経て、適応したの。そうすると今度は逆に日本に帰りたくない(笑)」

カルチャーショックは当然、ある。でも興味があって、その国のことを本当に知りたと思うなら自然と乗り越えられる。語学の壁についても同様だ。

「言語ってのはあくまで手段でしかないんです。例えるならお寿司屋さんの包丁と同じで、その国を理解しようと思ったら必要な道具なんですね。大事なのはどんな寿司を握るかですよね。」

だからこそ、興味のある国に対してはもっと積極的に向き合ってほしいというのが近藤さんの意見だ。

「ある大学で東アジア論の講師をやっていたんです。その授業を取っている学生は当然海外に興味があるだろうから、長期休暇の間にどこでもいいからアジアの国に行って

みなさいと学生にいいました。ところが休暇明けに聞いてみると誰も行っていない。聞くと、日本の居心地がいいからわざわざ出て行く気が起きない、ネットがあるから行かなくても分かったか。でもそうじゃなくて、直接行かないとわからない実感みたいなものはあると思うんです。」

インターネットもあくまで手段だ。それが本当に興味がある国を深く知りたいという自分の目的に一致しているのか。それが近藤さんの問題提起である。

「最近の若い記者にもいるんです。インターネット使ってメールの質問だけでインタビューを済ませてしまう。確かにそれでもそんなに変わらないのかもしれない。でも『生の感触』というか、その場に行って五感で感じたことを大切にしてほしいですね。」



海外に向かうモチベーション

しかし、である。海外にハードルがあることが事実である以上、そこで本当に自分の能力を生かせるのか、もしかしたら中途半端に終わるのではないか、そんなことを心配して二の足を踏んでしまう学生もいるだろう。ハードルを乗り越えてまで海外に向かうには、何か保証のようなものが欲しいと思ってしまうのが人の心というものだ。そんな私たちに近藤さんはご自身の経験を語って下さった。

「僕は中国語で連載を持っているけど、確かに日本語で書いた方が自分の意見は表現しやすいと思う。でも、日本にいて日本語で書いてる人って数万人、ツイッターとかも含めるともっといる。逆に中国語を操れる日本人は少ない。それに、僕は日本で政治記者をやっていたことがあるから中国では誰よりも日本の政治への理解に強い自信がある。共産主義の中国だと民主主義の日本政治の動きがわからないわけね。そういう意味で需要はあると思う。」

中国、日本と二つの国を渡り歩いてきた近藤さんから見れば、最近の尖閣問題のように、両国は隣同士なのにお互いを全く理解していない。その中で近藤さんの中国語の能力と政治記者としての手腕は需要があるだけでなく、不理解の溝を埋めるかもしれない価値も帯びてくる。そういう意味で海外には日本にないチャンスがあるのだ。そして、チャンスに留まらない魅力もあると指摘する。

「中国は今、世界最大の市場だから昔の東京みたいに世界の優秀な人材が集まってくる。そういう才能のぶつかり合いをみる楽しさはあるよね。どの分野にも世界にはとてつもないレベルが存在する。だから、ある分野を極めたいと思う人が世界を見ておく価値ってというのは必ずあると思う。」

外と向き合うなら、まず内を見よ

これまでの話から、海外と向き合うことの価値の大きさがうかがい知れる。では、進むグローバル化の中で私たちはどのように海外に向き合えばいいのだろうか。先ほどの学生の話にみられるような「内向き志向」を打破しなければならないのだろうか。この私たちが最も気になった部分を最後に近藤さんに尋ねてみた。個人的に、もっと広い視野を持とう、などの抽象的な話が出るのではないかと予想していた。しかし、近藤さんの答えは違った。

「打破・・・ね。僕は必要がないなら海外に行かなくてもいいと思うんです。何を求めるかの問題だと思います。」

ふつう、グローバル化や学生の内向き志向が語られる時には、とりあえず海外に行けという言葉外のニュアンスが感じられる時が多々ある。そういう意味で、近藤さんの答えは全くの予想外であった。

「海外はリスクもあってチャンスもある場。あくまで自己実現のための手段の一つとして僕は捉えています。」

ここに海外との向き合い方のヒントが隠されている。

ここでいう自己実現とは自分のやりたいことをしたり、自分の能力を生かした働き方をすることだろう。例えば近藤さんは先ほども述べたように、中国という「外」に目を向けたことで、自身の政治記者としての能力を生かしている。海外に適応するためにはハードルは確かに存在するが、興味や必要があれば自然に乗り越えられる。だから、そういう人たちは恐れず海外を見ることに価値がある。しかし、逆に興味や必要がなければ、海外と向き合いそこに価値を見出すレベルになるのは難しい。そうすると自己実現の部分がおろそかになる。だからこそ、自分が何をしたいかという目的のところが重要になってくる。

そもそも「働く」には二つの目的がある、と近藤さんは語る。一つは当たり前のように、お金を稼ぐこと。二つ目が自己実現の要素だ。一つ目に関していえば、ここでびっくりするような差はつかない。だから大事なものは二つ目の自己実現である、と。自己実現こそが働く「目的」であり、そこに重点を置くとするならば、確かに「海外」というのはあくまで「手段」の域を出ない。

近藤さんは続けてこう語ってくれた。

「外に目を向けるというより内に目を向けることなんですよ。」

あくまで海外に出るというのは「手段」でしかない。大切なのは自己実現のために、自分が本当にやりたいことは何か、という「目的」を考える姿勢だ。

思えば、最近よく聞く「グローバル化」という言葉。だが、ある日突然この世界がグローバルになったわけではない。インターネットなどの技術に裏打ちされて、世界が段々と繋がっていき、私たちが国を超えた活動をしやすくなったということを意味している。だから、このグローバル化も、私たちが海外に飛び出すことを助けてくれる手段であるといえるのではないか。恐らく、グローバル化の流れは止まることはなく、私たちの「働く」は「海外」という選択肢を、選ぶかどうかは別として、無視できないものとなるだろう。その時どのように海外に向き合ったらよいのか、学生の悩みは尽きない。しかし、あくまで海外やグローバル化が手段なのだとしたら。海外は求めるならば適応できる。特別視をする必要はない。「手段」の議論で詰まり、何も行動ができないのは本末転倒ではないだろうか。私たちに求められているのは、まず自分と向き合うことだ。そして「目的」を明確にする。そのうえで目的達成のために最もよい手段を考えることである。その時初めて、私たちは堂々と海外に向き合い、臆することなくその可

能性を生かせるのではないか。これこそがグローバル時代の「海外」との向き合い方である。

【学生のリフレクション】

網島健

私は幼少期を海外で過ごし、大学の休暇中に短期留学や旅行で海外に行った経験があったため、比較的海外には馴染みがありました。漠然と海外で働きたいという思いがありましたが、近藤さんのお話はそれだけでは駄目で、自分が何をしたいのかを見極め、海外に行った方がチャンスがあれば海外に行けということでした。逆に近藤さんのお話を聞くうちに昨今騒がれている若者の内向き志向は、「自分の活躍の場選び」の手持ちカードが国内しかない状態だと思いました。自分が活躍できる場所を選ぶ際の選択肢は多い方がよいに決まっています。近藤さんのインタビューで、海外を手持ちカードに入れることの重要性を私は一番に教えてもらった気がしました。

馮千溪

今回は近藤さんをインタビューすることができ、海外に働くモチベーションや意味を広く同世代に人と共有することができ、非常に嬉しいことだと思います。初めて中国の雑誌コラムで近藤さんの書いた文章を拝見したのは高校二年生の頃のことでした。その時から近藤さんがどのような理由から中国で働くことにしたのか、近藤さんの中国の文化と触れ合い方に興味を持つようになりました。

今回のインタビューを通し、近藤さんの中国で働いた時のことも、彼の若い頃の話も聞くことができ、海外で働くのも自己実現の手段であることをわかりました。中国語で日本人の考えを伝え、お互いの理解を深めようとし、日中の架け橋になるように頑張る近藤さんの姿に感動しました。動画を編集する際、さらに近藤さんの文化差への鋭さを感じました。今回私たちのグループのビデオは、文章を補い、そのメッセージを伝えられればいいと思います。

岩尾和典

この班の馮さんは中国からの留学生です（リフレクション文を見る限りは想像も尽きませんが）。そういうこともあってインタビュー中には近藤さんと馮さんが中国語で語

り合うという一幕もありました。(動画では割愛させていただきました。すみません。)
その中で馮さんは留学している理由を「もっと広い世界を見たいから」といいました。
近藤さんもそれについて共感していました。近藤さんが中国に魅せられたように、海外
というのは身構えるものではなく、もっと素直な感情で向き合ってもいいということだ
と思います。そういう素直な実感の重要性を指摘する近藤さんの言葉は、ある意味「海
外に行け」と頭ごなしにいう人よりも難しいことを求めているかもしれません。しかし
それは全ての「働く」に通じることと感じました。

謝辞

この授業には、現役のテレビディレクター、雑誌記者、編集者、電子書籍開発会社の方々にご支援を頂きました。この場を借りて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(順不同、敬称略)

- ・ 大房潤一(映像ディレクター)
- ・ 間杉俊彦(ダイヤモンド社)
- ・ イースト株式会社

東大発2013

2012年度 全学自由ゼミナール「メディア創造ワークショップ」作品

著者

馬場寄聡、小和口真聖、西條柚（1班）

井手佑翼、大谷啓人、京極周、小林夏美（2班）

岡ゆづは、城所和樹、鈴木花奈子（3班）

梅里亮介、櫻井一彬、潘嘉敏、松井大樹（4班）

綱島健、馮千溪、岩尾和典（5班）

編者

中原淳（東京大学 大学総合教育研究センター 准教授）

重田勝介（東京大学 大学総合教育研究センター 助教）

制作協力

大房潤一(映像ディレクター)

間杉俊彦(ダイヤモンド社)

イースト株式会社

発行

東京大学 大学総合教育研究センター